

運命か否天命だった

我が従軍記録

愛媛県 富田 磯海

私は大正九年二月十九日、愛媛県旧喜多郡平野村平地二三六六（現大洲市）で生まれた。昭和十五年徴集で検査では甲種合格、イの一番です。数十日して役場から、近衛兵に推薦していたが今年は当村からは近衛兵の採用がなかった、と言われ、その年の十二月一日、台湾軍山砲第五部隊（台北、それまでは独立山砲第四八連隊）に私ただ一人現地入隊の知らせを受けた。入隊したら難儀をするのを覚悟で行くが、行く日まで自ら進んで苦難な道を歩んで心身を鍛えた。

集合は博多、出発の日は晴天だったが夕方の風は冷たくオーバーの襟を立てる位であった。二度と故郷に帰れぬかも知れぬという親心だったろうか、別府の叔母の家に一泊、戦いの神、熊本の加藤清正公の神社に

も参拝、博多泊まりの上、集合場所博多公園で父と別れた。初年兵受領者は角田曹長だった。出港までの基礎教育を受け、出帆してから四日程で台湾基隆に着いた。人員は二個中隊、各隊六十名ぐらいだった。

基隆から汽車で台北駅へ着くと、愛国婦人会や小中学生が道路一杯になって歓迎してくれた。馬がいる山砲隊は他の兵科より苦勞があるということは知るよしもない運命である。一週間ぐらいは身辺整理、身上調査などの静かな日であった。班長は身上を見て「お前は青年学校で模範青年と書いてある」であるから通信兵ということになった。「通信は上官と離れ単独行動することが多い、責任感が強く真面目でないといけない、頑張れ」と教官も班長も言われた。

それからいよいよ厳しい演習や内務教育が始まった。「鬼よりこわい山砲隊」とアダ名が付いていたので、ピンタぐらいは平気だった。入隊して間もない頃、中隊長の精神訓話の時間に一番先に手を挙げて答えた。そのためか名前も覚えられたし、私は国家のため尽くすつもりで努力していたお陰で一選抜で進級もした。

先輩から下士官候補せよと進められたが、長男であるから下土候はしなかった。

私の入営は大東亞戦争勃発一年前でした。九月に同年兵は野戦へ転属の命令が出たが、私の名前は呼ばれないので班長に聞きに行った。班長は、野戦へ出て金鵄勲章を貰い負傷した軍曹だったが「名簿落ちではない。お前は戦地へ行きたいか。しかし、国家のために尽くすというなら戦地も内地も同じだ。内地で教育に励め」と言う。結局外地へ行かず教育係だけだった。運命に逆らうことは出来ない。私は如何なる戦場でもやれぬような体力ぎりぎりの線まで鍛えた。班長もこれを認めてくれ心ひそかに嬉しく思っていた。そのため新兵係の助教となった。

模範兵として表彰もされ、伍長勤務兵長時代に人事係准尉に呼ばれて、第三内務班長を命ぜられた。「○軍曹はずぼらで何をして中隊でビリだ。今中隊に伍勤兵長が四人いるが、お前なら出来ると思うから班長にした」と言われた。しかし、他の班長は皆軍曹で私は二階級下である。この違いは率先垂範してやるし

かないと思ひ頑張った。

馬検査では中隊一となり、中隊整列の中でお褒めの言葉を頂いた。今までは何をして中隊ビリだったが、富田兵長になって一等になれた、とも言われた。「是は一朝一夕でこの様にできるものでなく、日頃から愛馬心旺盛な証拠である」との馬掛将校、人事係の講評だから、すっかり気を良くした兵士達もやる気を起こした。

我が同年兵は野戦に行き、班長の戦友も野戦へ行っていた関係もあり、以後何をやっても一、二を競う内務班になった。山砲隊は二個中隊が車両隊、我が中隊だけは以前と変わらぬ馬中隊である。馬は人間より大切に、一寸の外傷でもしようものなら大目玉。新兵の時「お前等は消耗品だ、馬は兵器だ」と古兵から怒鳴られた。私は他班で、精勲章や中隊長の模範兵表彰の新兵係をやっていた高知県の無二の戦友とは「先輩が言ったような言葉は使うまい」と誓いあっていた。戦友をはじめ多くの人達がだんだんと戦地へ行った。教官も多くが戦地へ出るので次から次へと変わって

いった。一番始めの教官は「富田よ一足先に野戦に行くが、お前は通信下士官で来いよ」と言われた。教官といっても名ばかりの教官もいたが、沖縄出身の教官の時、夜間演習でも部隊一になって外出を許された。その時初めて外で散髪し、一日楽しい外出をさせてもらった。今でも教官が懐かしく思ってくれ「沖繩へ来い」とも言われ、奥さんも待っていてくれた。しかし五月に手紙を頂き「奥さんが脳梗塞で倒れた」とのことであったが、神の引き合わせかその後お会いするこゝとが出来た。

私は昭和十九年七月、新編成の第六十六師団の迫撃砲隊（敢一七八八）第三中隊付となった。その頃は既に米軍が台湾に上陸するという。各部隊はそれぞれ、海岸などにトーチカや横穴陣地構築をやった。その時私は伍長に任官していて、兵隊は一生懸命やってくれ、トーチカは砂とセメントのコンクリート造りであった。新師団が編成された時、通信兵も分けねばならない。私は一期古い通信兵を引き連れて東海岸に転属したが、検閲が終わったばかりの連中は残留組となった。「班

長と一緒が良い」と涙ながらに言ってくれた連中もいたが命令では仕方がない。お互い任地で頑張ろうと別れた。三年有余の台北第五部隊の従軍生活に別れを告げた。第三中隊に富田ありと、他中隊でも私を良く知ってくれた。

新設部隊は迫撃砲部隊であり、やはり馬部隊だった。将校は召集者が多く老体で、中堅でやるのは下士官だった。駐屯地は花蓮港の工業学校を宿舍にして海岸対戦車壕、砲塔トーチカ陣地、山は横穴掘りだった。我々は米軍の上陸に万全を期すべく陣地の構築に余念が無かったのである。その時、中隊長からお呼びの電話があり「ご苦労だが内地へ行って台湾へ来る現役兵の受領に帰ってくれ」という命を受けたのである。また、会いたい人もあるだろうから今夜は十二時まで臨時外出を与えるとも言われた。内台航路も制海空権も米軍が握っており、非常に危険な状態になっていた。

富田よ一の餓食だぞと皆に言われ敷布を貰い「是を船がやられたら海に流しておけ、饑は一回では襲わない。一回襲って自分の身より大きかったら止める。小

さかったら二回目に襲って来る。その時、立泳ぎと平泳ぎを交互にしろ」等と戦友は教えてくれた。

初年兵宰領者は迫撃砲隊で軍曹一人、伍長三人の計四人だった。内地への出発は昭和十九年八月、台湾での三年余り母のように良くして貰った戦友の家があった。花蓮港を南廻りして台北に立ち寄った。基隆港で親友にも会い十六隻の船団は出発した。その日は八月二十日前後だと思ふ。

初日の夕方、軍や船団の捕鯨母船「凶南丸」に魚雷命中、轟沈は免れたが重油を積んでいたためか夜半水平線が見えなくなるまで燃え続けて沈没した。幸い乗員は全員他船に救助された。以後、大暴風雨もあったが、八千トン級の私の乗船はじめ、「凶南丸」以外は八月下旬無事博多へ着くことが出来た。

電話を掛けずに家に帰ると、父は老いて見えたが「実は兵隊を連れに帰った」と報告した。私が入隊中、結婚した妹は体をこわし休養中、妹の主人は出征中、弟は一週間後に入隊、次の弟は商船学校に入學して海軍予備令により海軍式教育を受けており、近所の後輩

が明日出発するという。「磯海さんが帰っているようなら今晚お祝いするので軍隊の話をして下さい」とのことで、その席に出て軍歌を歌って元気で帰って来るようにと言って家に戻った。このようにあわただしい帰宅であったが、周囲は皆軍隊との関係ある状況に変化していた。

翌早朝、入隊兵を受領のため家を出発したが、十代で結婚した両親は四十歳を少し越えたばかりなのに歳をとったように感じた。「元気でまた行ってくるよ」と言ったものの、長男の私、妹の主人、弟二人は軍籍にある。今日は元気で顔を合わせたか、次に会う時三人と無事に会うことはないだろうと思ひ、ほろりと涙が出たが、その涙を母に見せまいとそっと拭いた。「元気で帰ってくるぞ」と弟妹たちに別れたが、何事も素直に聞いて兄弟喧嘩など一度もしたことはない兄弟だった。

初めて味合う現役新兵受領、福留軍曹は原隊、私は輜重兵隊、寺岡伍長は飛行隊、もう一人の伍長は会計ということで無事受領を終えたが、付き添って来た父

兄は出港まで帰ろうともしない。それもそのはず、サイパン玉砕、硫黄島は激戦中、前にはアッツ島も玉砕していた。「班長さん頼みます」と言われても私がどうすることも出来るものではなかった。

出帆して数日後「敵潜水艦接近せり」との情報が入り、護衛艦の爆雷攻撃で兵士達も静まり、顔は青ざめているではないか。「お前達安心せよ、この俺が乗っている以上弾は当たらん。若し当たっても船は絶対沈まんから大丈夫だ」と大声で言った。すると「班長殿が乗っていたら弾は当たりませんか」と言う兵士もいた。「絶対当たらんから落ち着け」と言っていた。兵士達も安心したのか落ち着いてもと通り賑やかになり、その後敵潜水艦も近づかず帰りも八日間で基隆港に着いた。

九月に台湾に帰った私には大仕事如山積みしていた。日時ははつきりしないが、受領兵をそれぞれの部隊に引き渡し、大任を果して中隊長に報告した。隊長は「富田ご苦労を掛けた。情報によると沖縄は艦砲射撃と空爆で山が変形している」と言われた。その中隊長

は台湾応召だったが、内地引率の中隊長も応召の先任だったので台東に転属するという。その夜送別会をしていたら空襲警報が鳴り機材を蛸壺に退避させた。

東が白む太平洋の水平線上に飛行機の編隊が見えてきた。エカド山（蕃社の山―高砂族が住んでいる）の上で編隊を解いたかと思うと、港へ向け爆弾を投下しては海上へと消えていった。星のマークのグラマン機だった。東海岸は何分新設部隊で応戦する火器もない、まして我々通信隊は対戦出来る武器はない。グラマン機は波状的に飛来して、港は火の海と化し、油の入ったドラム缶は次々と燃え広がった。

このようにして、第一日目は基隆、高雄、花蓮港、二日目は大きな街、四日目は上陸との予告であった。総ての連絡は私達通信隊だが、目標である港へ落す爆弾が誤って私の近くに落ち出した。危険だと思って、グラマンが飛び去った後蛸壺に掩蓋をしておこうと丸太の棒で覆った。するとその後グラマンの爆弾が近くに落ち破片が丸太棒に当たり、腕はおろか心臓まで射ち破れそうで、この世とも思われぬ状況だった。また

焼夷弾も落され、機銃掃射もあり危険この上もない。

数日して新竹へ移動となった。米軍上陸の最適地なので、私たちは水際防御をすることになる。中隊長は「一緒に死のう」「最後の命令は玉碎」である。戦車の底に対戦車爆雷（三十センチ角）を放り込む。円錐状、バケツ状の柄がついている。戦車の下に差し込み伏せて自分も死ぬこととなる。このような訓練をしていた。

我が通信隊は常に連絡を取らねばならぬので補修施設に飛び廻らなければならず、常に単独で行動することが多く、爆撃より機銃掃射には気を付けよといった。基隆では三十六機撃ち落とし、その中のパイロットの話では「一は港湾、二は交通機関、三日市街地、四日目上陸と、お前達が捕虜となっても必ず取り戻してやる」と言われていたという女のパイロットがいたという。

高雄でも百五十機撃ち落したというが、何しろ延べ二千機以上というのだからどうしようもなかった。西海岸の防備部落は新設で、充分の兵器もなく、撃った

らなお目標にされるので静観せよ。上陸して来た時白兵戦で防げとのことであった。

だが米軍は予定通り爆撃は敢行したけれど四日目の上陸だけはしなかった。それは沖繩よりは防備が堅固だったため諦めてフィリピンへ廻ったとかの説もあったが定かではない。以後米軍上陸の最適地は総督府、軍司令部のある台北に近い所、新竹洲大南湾、そこは遠浅、大平原、数万が上陸可能な所であった。屯営を出てからは陣地構築等で、とくに原住民に接する機会が多くなり、私は輩下に常に「原住民は大切にせよ」と言っていた。

私の管区の通信網は二十キロ位で、兵も一年もすればもう一人前の通信手となり、水際防衛の観測施工（各部隊間、砲と観測隊の中を一・五ミリの地下ケーブルを設置）完遂日が陸下の「敗戦玉音放送の日」と重なった（その情報、終戦を知ったのは我々通信隊だった）。物静かな重々しい陸下のお言葉を聞いた。勝つことを信じて昨日までいたのに、神も仏もないと地弾大踏む兵士達もいた。

終戦となり、台湾の志願兵もいたけれども即時帰郷させた。現役志願兵でただ一人の優秀な呂見習士官は、入隊してから私と一緒にいたことが幸いし、除隊して陣地を去る時、盛大な送別会を催して「本当に永い間お世話になりました。日本軍の高恩は終生忘れません」と挨拶をされた（この人とは台湾へ呼ばれて台北で再会したし、宇和島の人には台湾へ行くたびにお会いしている）。

我々の敢一七八八部隊は編成地が花蓮港なので新竹地区から台湾を横断した。毎日二十キロの道を移動するのは平気だったが道程は遠かった。装具を身につけての行軍である。目的地へ到着してからは現地自活の生活をせねばならない。甘薯作りや稲刈りなど農家に協力することも食にありつける一つの方法でもあった。またコンクリート工場の石灰岩のトロッコ操縦は一回二人で七円、饅頭が七個買えた。

そうしている間に、私は敗戦の残務整理の書類を軍司令部へ持って行く特使を命ぜられた。汽車の終点である東海岸の蘇澳は原住民がスパイの嫌疑で殺された

ので軍隊に対し悪感情を持っている。夜の一人歩きはするなよと言われたので、どうしてこのような大切な任務を私一人に命ぜられたのであろうか。輸送糧は台湾人のものになってしまっている。木炭車になっている自動車は途中で順々に荷物を積み込まれる。二百二十キロの道を夕方六時頃着く。途中エンストで動かなくなり、目的地蘇澳の十二キロ手前なのだ。止むなく徒歩で行くことにしたが、東海岸は岩の断崖絶壁の所が多く、海面三百メートルの所に道路があるが、それも岩をくり貫いた細い道がついており、車が通る所だけコンクリート舗装をしてある状態である。私は足を痛めて大切な書類を背負っているので蘇澳に着いた時は十時を過ぎていたが、街にはまだ灯がついていた。途中自動車に乗った青年が寄って来て「兵隊さん遅くなって御苦労さんです」と言って通り過ぎていった。私は腹が空いたので食堂に入ってビールを頼んで待つていたら先の自動車の青年が入って来た。「日本戦争に負けたとて見捨てるべきでない」「そうだそうだ」「話す言葉も日本語が話しやすい。文化教育が進

んで教育程度が向上したのも日本人のおかげだ」という話を聞き、こういう青年がおるから心丈夫に思った。

しかし、その後、本島人に対する外地での日本人、日本軍の仕打ちに対する非難も大きくなり、彼等の劍幕に食堂内にいた内地人夫婦は逃げるように飛び出していった。私は武器一切持たず、大事な書類を持ってゐる。非難した台湾人は五人、いざとなったら書類を守らなければならぬので、殺すまではしなからうから、彼等が気の済むまで叩かれようと覚悟を決めていた。

今まで日本語で話しをしていた彼等が急に台湾語で話し、私の所にやってきて私に向かい、「兵隊さんは内地から来ましたか、台湾からの応召ですか」と問う。「私は内地から来た現役兵で台湾軍部隊に現地入隊です」と答えると台湾人は「私も志願制度が出来て三度志願したが駄目でした。国語競技大会に出て、台北州で一番、台湾全島二番でした。一番は高砂族でした。父は漢文を勉強せよ、蔣介石の戦法は必ず勝つと言つて必ず役立つことがあると言つた。私は日本語を勉強

して国鉄に働いている兄さんの隣の学校で教員をしています。弟は海南島へ軍属で行き戦死しました。それもお国のためと後悔しません。しかし兵隊さん、階級が物をいう軍隊で、上等兵が台湾人の伍長に、まるで部下のように言っている。台湾人は差別されるのか、残念でならなかった」と話す。

そこで良い機会と思い「私の部隊には呂輝煌という見習士官がいる。私は初年兵の時から教育した。止むを得ない時はビンタも張った。しかしどんな教育したか、逃げも隠れもしない敢一七八八部隊の冨田軍曹だ。帽子の名前を見てくれ、星の数が上(上官)になったので敬礼する。呂見習士官も総てを教えてくれた班長と思つて敬礼してくれる。敬礼と答礼が一緒になることが多い、私は陣地を去る時本島人や志願兵、呂見習士官等に別れを惜しまれ盛大な送別会を催してもらい、台湾に残れとまで言われた」と答えました。

「兵隊さんは悪い人でないことは判つたが、偽者の内地人が多く、日本軍を傘にして横暴をした台湾人警察官もいたので真つ先に叩きのめしてやった。また、

兵隊の貴方がやって来たので、皆で叩きのばしてやる
うと思ってやって来た。」と彼は言っていて理解した。

私は「中国と日本が戦争するのは間違っている。も
ともとは兄弟の仲ではないか、誰だって好き好んで戦
争する者はいない。平和の内に物事を解決しようとし
たのに意見が合わず戦争し、日本が負けた。アジアで
腰の立つのは貴方の母国中国しかない。しっかりとし
ないと白人のため奴隷にされるから」と言った。彼は、
これから貴方に危害を加える者はいないと言われ、私
は駅のベンチで一夜を明かし、一番列車で台北の軍司
令部へ行き、書類を渡し大任を果たすことが出来まし
た。

終戦後、隊長から流れ弾に当たって犬死にするな、
といわれていたし、単独でこの大任を済まし、心しな
がら台北の焼野が原で友人の家を捜したことなどをし
たが、幸いに憲兵の護衛もつけ、珍しいコーヒーなど
御馳走になり花連港に帰ることが出来ました。

その時、憲兵の話では、台湾は比較的食品事情も
良いので帰国は昭和二十四年頃になるだろうというこ

とでした。しかし、食糧があるといっても、今までの
ような米の供給は無く、少し暇があれば山菜や野草
（飛行機草）を採ったり、蛇、かたつむり、野犬など
まで食べて飢えをしのいでいた。まさに窮すれば通ず
の生活でした。

復員の前は軍用物資の引き渡しのため本隊と離れ、
兵五名を連れて残留しました。将校連中も沢山いるし、
下士官もいたが、私は何故再三危険な処に任務を与え
られるのだろうか。戦争中なら金鶏勲章に値するのだ
が、私が原住民にも信頼され、お陰で部下通信兵にも
信頼して貰い、敗戦前も班長の命令なら「水火尚辞さ
ない」とも言ってくれた。また終戦後、兵科の者が暴
動をたくらんだ時、私に相談に来て、思い止まってく
れたこともあった。そんなことから、現地での残留と
なったのかと、自分自身に言い聞かせていました。

本隊が帰ってから五日程遅れ、軍用物資を引き渡し、
運良く駆逐艦にて基隆から大暴風雨の中二昼夜で鹿兒
島港に着いたが、私は酔いがひどく、二日間飲まず
食わず、波は上甲板まで打ち上げ、便所へも行けぬ難

航でした。海軍の情けで、上陸時赤飯の握り飯と缶詰
二、三個を頂いたが、二昼夜飲食出来ぬ私が、陸地へ
上がれば元気になれた。

上陸は昭和二十一年三月六日、七日の晩尾道着、部
下五人は九州出身なので、私一人、懐には二百円の金
しかなかった。夕方牡丹雪が降っている。四国へ渡る
船はない。宿も一杯で泊めてくれる所もない。敗残兵
のあわれな姿で茫然としていると「兵隊さん何処から
引き揚げたのですか」というので「台湾」と答えたら
「私は台湾人で因島造船所に徴用工で来ていて、家内
は日本人を買った。この寒さに此処におったら風邪を
引きます。是非家に来て泊まりなさい」と言われる。
本当に地獄に仏とはこのことでした。

私は前日から何も食べていないので食事をさせて
貰った。内地も食糧難の時代なのに焼魚まで出してく
れる。台湾の話しながら夜更けまで、布団は一
枚の上下のみ、そこに三人で寝たが、翌朝奥さんは早
く起き焼飯を作ってくれる。さらに帰る時、固辞する
私に弁当まで持たせて頂いた、何という有り難いこと

か。

今の人には通じないかも知れないが、教育勸語が人
間道徳の神髄と信じ、軍人勸諭の精神をもって行動し、
戦陣訓に無辜の住民は愛護せよとある。支那事変当時、
我々が十七、八歳頃、野戦帰りの人から戦地での非道
を面白半分、誇張して話すのを聞いた記憶がある。こ
れ等の戒めが戦陣訓にもあると聞いた。私は台湾にい
て、植民地政策にあえぐ現住民の姿を見て、心の底か
ら大切にしていた。私の力と心で出来ることは、老若
男女の台湾人にしてきたつもりです。敗戦後にそれが、
私に返って来た。

日本は負けることがないと信じていたが、百八十度
変わった後に、良く判った。尾道での台湾人から受け
たご恩は、私の生きている限り脳裏から離れないだろ
う。台湾人の靈魂が私に付いて帰って来たものではな
かるか。私の従軍は軍命か、否天命であったと、今な
お不思議でなりません。